
宝石の魔物・ジュエル

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝石の魔物・ジュエル

【Nコード】

N4650A

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

涙を宝石に変える魔物・ジュエルが、シェリーを誘拐した！ブラゴは清麿、ガッシュと共に彼女を助けに向かう！！はたして結末は？そして2人の関係に進展は！？

前編・涙を宝石に変える魔物（前書き）

このお話は、「金色のガッシュ!!」を題材にした小説です。お話の舞台は、石版編が集結してから少したった設定になっています。それでは、本文にどうぞ。

前編・涙を宝石に変える魔物

ここはフランス。

ブラゴの本の持ち主、シェリーの住んでいる場所。今日シェリーは、ブラゴとの出会い記念に彼に指輪をプレゼントしようと思って、町の宝石店にココと一緒に買い物に出かけていた。ちなみに今日のシェリーは、ベルモンド家のお嬢様だと気づかれにくいよう、ピンクのノースリーブにミニスカート姿だった。

ココ

「ブラゴ君に指輪をプレゼントするだなんて、シェリーもやるわね！」

シェリー

「／／／え、ええ、まあね・・・／／／」

ココ

「きつとブラゴ君、喜ぶわよ。」

シェリー

「ね、ねえココ、どうしてブラゴの事を君づけするの?」

ココ

「だって、彼は私の命の恩人で、あなたの命の恩人でもあるのよ? 彼にはいくら感謝しても足りないもの。」

シェリー

「で、でも、ブラゴに君づけは・・・」

ココ

「シェリーも彼を君づけすればいいじゃない！」

シェリー

「／／／え！そ、そんな・・・／／／」

ココ

「シェリーったら、すぐ赤くなるゝ！！」

シェリー

「ココ、からかわないでよ・・・」

シェリーとココは、町の宝石店に着いた。

ココ

「これなんかどう？ブラゴ君に合うと思うよ！」

シェリー

「あ、ありがと、ココ・・・じゃあこれにしようかしら・・・」

シェリーとココは指輪を購入して、宝石店をあとにした。

ココ

「じゃあ、私帰るわ。」

シェリー

「今日はつき合ってくれてありがとうね。」

ココ

「じゃあね、シェリー！ちゃんとブラゴ君に告白するんだぞー！！」

そう言って、ココは帰っていった。

シェリー

「／／もう、ココったら・・・／／」

シェリーは赤面しながら、家に向かって歩きだした。そのシェリーを、後ろからつけている男がいた。

シェリーは、いつもは通らない裏道を通って帰っていた。

シェリー

「ブラゴに告白、か・・・。考えてみれば、魔界の王を決める戦いに最後まで勝ち進めても、戦いが終わればブラゴは魔界に帰ってしまふのよね・・・私・・・ブラゴの事を・・・。って、何赤くなってるの私！ブラゴを好きだなんて、そんな事あるわけ・・・ブラゴは、私の事をどう思ってるのかしら？ただのパートナーとして見るようには、どうしても思えないのよね・・・」

シェリーはブラゴの事を考えていた。

シェリー

「やっぱり私、ブラゴの事が好きなの？告白した方がいいのかなあ・・・」

そんな事を考えているシェリーが、気づくはずもなかった。自分の後ろに、怪しい男が近づいている事など・・・。

シェリー

「うっ！！！」

突然、シェリーは背後から口をハンカチで塞がれた。

シェリー

「むぐ、むぐうゝ！！」

シェリーは必死にもがいたが、男の握力が強く、逃げられなかった。しかも、ハンカチには睡眠薬が仕込まれていたらしい。

シェリー

「うう・・・（ブ・・・ブラゴ・・・）」

シェリーは意識を失い、倒れ込んだ。シェリーを襲った男は、シェリーが気絶したのを確かめると、彼女を抱えて走り去っていった。

シェリーが目を覚めたのは、それから数時間後の事だった。

シェリー

「ん・・・うう・・・」

シェリーは体を動かそうとしたが・・・

シェリー

「ん、んっ・・・（か、体が動かない・・・それに、口も何かで塞がれてる！？）」

そう、シェリーは口をガムテープで塞がれ、手足を縄でグルグル巻きに縛られていたのだ。

シェリー

「んゝ、んんゝー！！（ダ、ダメだわ、声が出せない・・・）」

シェリーは、自分の身に何が起こったのか、整理してみた。

シェリー

「（そ、そうだわ、思い出した・・・確か私、いつも通らない裏道を通ってて・・・そうしたら、いきなり背後から口をハンカチで塞がれて・・・それで急に気が遠くなつて・・・）」

シェリーは、自分が何者かに誘拐された事に気づいた。

シェリー

「（でも、どうして・・・？今日の私の服装は、お嬢様にはとても見えないのに・・・）」

何度も言うようだが、今日のシェリーはピンクのノースリーブにミニスカート姿である。

シェリー

「（だとすると、他の目的が・・・？）」

????

「目が覚めたようだな・・・」

シェリー

「!?!」

シェリーが振り向くと、1人の男と1人の少女が箱に座っていた。

男の方は人間だとわかったが、少女の方は人間には見えなかった。

????

「気分はどうだ？シェリー・ベルモンド。」

男はそう言つと、シェリーのガムテープをはがした。

シェリー

「最悪よ。」

シェリーは、男と少女をにらみつける。

????

「イヤ、ここは・・・ブラゴのパートナーと言った方がいいのかな？
なあ、ジュエル。」

シェリー

「え!?!」

ジュエル

「そうね。彼のパートナーだつていうわりには、少し簡単だったけどね。」

シェリー

「あなた達、何者!？」

ジュエル

「申し遅れたわね、アタシは魔物のジュエル。そして、アタシのパートナー、ザクロよ。」

シェリー

「あなた達、何の目的で私を?こんな事して、ただですむと思ってるの?」

ジュエル

「うるさいわね!ザクロ、この子の口を塞いで。」

ザクロ

「おう。」

ジュエルにザクロと呼ばれた男は、シェリーの口にガムテープを貼った。

シェリー

「んゝ、んんゝ・・・」

ジュエル

「さて、本題に入りましょうか。アタシ達があなたを誘拐した目的は、あなたのパートナー、ブラゴを呼び出して倒す事・・・そして、彼を失った時にあなたが流す涙を手に入れる事。」

シェリー

「!？」

ジュエル

「アタシには呪文以外に元々持っている能力があつてね・・・涙を宝石に変える力があるのよ。」

そう言うと、ジュエルはシェリーに歩み寄った。

ジュエル

「最愛のパートナーを失う時、その人はそれをとて悲しむ。その涙を宝石に変えれば、これ以上キレイな宝石はないのよ。あなたには悪いけど、ブラゴは倒させてもらっわ。」

シェリー

「（そ、そんなあ・・・）うつ、うつ・・・」

シェリーは涙を流した。その涙を、ジュエルは宝石に変えた。

ジュエル

「あら、やっぱりキレイだわ！この調子なら、もっとキレイな宝石が手に入るわね。さ、ザクロ。彼女の家に電話をかけて。」

ザクロ

「はい。」

ザクロは電話をかけ始めた。

シェリー

「ん、ん・・・（ブラゴ・・・助けて・・・！！）」

それから数時間後・・・

華

「清麿！お客さんよー！」

清麿

「はい。」

ガツシュ

「清麿、お客さんなのか？」

清麿

「ああ、誰だろう？ティオと恵さんかな？ウマゴンとサンビームさんかな？まさか、フォルゴレ達やウォンレイ達じゃ・・・」

ガツシュ

「いくらなんでも外国からはるばる来るとは思えんがのう・・・」

ところが、そのまさかだったのだ。玄関に立っていたのは、ブラゴだった・・・。

ガツシュ

「ブ、ブ、ブ・・・」

ブラゴ

「ガツシュ、久しぶりだな。」

ガツシュ

「ブリー！！」

ガツシュのボケ発言に、ブラゴと清磨はすっかりこけた。

清磨

「ガツシュ、ブリじゃなくてブラゴだろ・・・」

ガツシュ

「あ、本当なのだ。」

清磨

「で、ブラゴ。日本まではるばる何しに来たんだ？」

ブラゴ

「実は・・・」

清磨とガツシュは、ブラゴを部屋に案内した。

華

「清磨ー、ブラゴ君に何か出そうかー？」

ブラゴ

「あ、じゃあコーヒーをお願いします。」

華

「清磨もコーヒーでいいわね？」

ガツシュ

「私はアイスがいいのだ！」

ブラゴはコーヒーを飲みながら、今日来た理由を話し始めた。話が終わった瞬間、清磨とガツシュは叫び声をあげた。

清麿

「な、なんだってー!!」

ガツシュ

「シェリーが誘拐された〜!？」

ブラゴ

「あ、ああ・・・」

ブラゴはうつむいている。

清麿

「それで、家に身代金の要求とかなかったのか？」

ブラゴ

「それが、なぜかそういう要求じゃなかったんだ。犯人は、なぜかオレにある倉庫まで来い、とだけ電話してきたんだ。それにどうやら、オレが魔物だという事も知っているみたいだった・・・」

清麿

「まちがない!!誘拐犯は魔物とそのパートナーだ!!」

ガツシュ

「うぬう・・・」

清麿

「それで、ソイツ何か言っただけだったか？」

ブラゴ

「ああ・・・確かシェリーの涙が宝石になるとかどうとか・・・」

清麿

「涙を宝石に・・・？そんな魔物がいるのか？」

ブラゴ

「ああ・・・たぶん、それはジュエルの事だろう・・・」

清麿

「ジュエル？」

ブラゴ

「王族の1人で、両親が有名な宝石職人の女の魔物だ。オレも子供の頃、何度かアイツの宝石店に行った事がある・・・」

清麿

「なるほど、敵の目的がなんとなくわかった。たぶんソイツらは、ブラゴを倒す事で、シェリーが流すであろう涙を手に入れて、それを宝石に変えようとしているんだ・・・」

ブラゴ

「な、何！？」

清麿

「それならば、ヤツらがシェリーの家に身代金を要求しなかったのも納得がいく。アイツらの目的は、初めからオマエを倒す事なんだから・・・」

ブラゴ

「それで、頼みがあるんだが・・・」

清麿

「わかってる。一緒にシェリーを助けに行ってほしいんだろ？」

ガツシュ

「うぬ！私達も協力するのだ！！」

ブラゴ

「清麿・・・ガツシュ・・・ありがとう・・・」

清麿

「それで、倉庫とはどこにある？」

ブラゴ

「セーヌ街の第一倉庫らしい。」

清麿

「よし！待ってるよ、シェリー！！必ず助けてやるからな！！」

前編・涙を宝石に変える魔物（後書き）

シェリーを助けるため、ブラゴがガツシュと共に向かいます！はたしてジュエルの実力は！？次回は「後編・宝石よりも大切なもの」です。

ガツシュ「うぬう、早くシェリーを助け出さねば！」

シェリー「ブラゴ……！助けて……！」

ブラゴ「シェリー、待ってるよ……！」

清磨「それより、後編にはジュエルって子の呪文集がオマケにつくらしいぞ。」

ガツシュ「それは豪華だの……」

清磨・ガツシュ・ブラゴ・シェリー「それでは、後編をお楽しみに……！」

後編・宝石よりも大切なもの（前書き）

後編です。ブラゴのオリジナル呪文が登場します。オマケには、ジユエルの呪文集もついてます。それでは、本文へどうぞ。

後編・宝石よりも大切なもの

謎の魔物に誘拐されたシェリーを助けるため、ブラゴはガツシュ、清磨を連れてセーヌ街の第一倉庫に向かっていた。もちろん、2人とも本を持った状態である。

清磨

「準備はいいか？ガツシュ、ブラゴ!!」

ガツシュ

「うぬ!!」

ブラゴ

「もちろんだ!!」

清磨

「さあ、来たぞ!!謎の魔物よ!!シェリーを出せ!!」

清磨が叫ぶと、倉庫からジュエルとザクロが現れた。ザクロの手には、シェリーが抱えられている。

シェリー

「ブ、ブラゴ!!」

ブラゴ

「シェリー!!」

ジュエル

「ザクロ、彼女を放してあげて。」

ザクロ

「わかりました。おらよ!!」

ザクロはシェリーをブラゴの方に押し出した。

シェリー

「キャ!」

ブラゴ

「シェリー!」

ブラゴはシェリーの縄をほどき、彼女に本を渡した。

ブラゴ

「シェリー、大丈夫か?」

シェリー

「ええ!清麿君とガツシュ君もありがとう!」

清麿

「いくぞガツシュ、ブラゴ、シェリー!!」

ガツシュ

「うぬ!!」

ブラゴ

「ああ!!」

シェリー

「ええ!!」

清麿

「さあ、こい!!」

ジュエル

「フ・・・さあ、ザクロ、思う存分暴れなさい!!」

ザクロ

「ああ・・・いくぞ・・・」

清麿達は、覚悟を決めて身構えた。

ジュエルの両腕から氷の円盤が飛び出した。

ザクロはクリスホワイトの本を開き、呪文を唱えた。

ザクロ

「エルセム・ティアルドン!!!」

円盤が高速回転を始め、7つに分裂し、その間から巨大なビームが放たれた。

巨大なビームが、ガツシュ達に向かってきた。

シェリー

「アイツ、いきなりあんな呪文を!?!」

清麿

「シェリー、ブラゴ、下がれ！」

シェリーとブラゴが後ろに下がった。

清麿

「ラシルド！！」

ガッシュはラシルドを放った。しかし、ラシルドにヒビが入り始める。

ブラゴ

「いかん、ラシルドにヒビが！！」

清麿

「ザグルゼム！！ザグルゼム！！」

ガッシュが放ったザグルゼム2発が、ラシルドに当たり、ラシルドを強化した。しかし、まだヒビが入る。

清麿

「ザグルゼム！！」

ザグルゼムが3発たまったラシルドは、巨大化してエルセム・ティアルドンに跳ね返した。

ブラゴ

「おお、ザグルゼムで強化したラシルドが、あの最大呪文をハネ返した！！」

ジュエル

「へえ、あなた達、おもしろい術を持つてるわね？だけど・・・ザクロ！！」

ザクロ

「デイゴウ・シルティア！！」

ジュエルが放ったデイゴウ・シルティアは、ハネ返ってきたエルセム・ティアルドンをはね飛ばした。

ジュエル

「フフフ、そのザグルゼムって術、力をためる能力があるのね。だけど、アタシの最大級の盾は壊せないようね？」

清麿

「よし、ガツシュ、ブラゴ、そのまま突っ込むんだ！！」

シエリー

「相手は今、強力な呪文の連発で心の力をかなり失ってる！大きな術の反撃はないわ！！」

ガツシュ・ブラゴ

「おおおお！！」

ガツシュとブラゴは、ジュエルに突っ込んだ。

ジュエル

「へえ、さすがね。でも、アタシの素の力もなめないですよ！！」

ジュエルは、向かってきたガツシュとブラゴの手を受け止めた。

清麿

「な、何！？ガツシュ、ブラゴと同等以上の腕力を！？」

シェリー

「しかも、相手にダメージを感じられないわ！！」

ジュエル

「それに清麿君にシェリー、あなた達は1つよみまちがえてる！！アタシが考えもなしに最初から最大呪文を撃つたと思ってるの？ザクロ！」

ザクロは、注射器のような物を取り出した。

ザクロ

「教えてやろう、宝石の栄養液だ。涙を宝石に変えた物を、ジュエルがさらに加工した液。体力はもちろん、心の力もすぐに戻る。」

ザクロは注射器を首に突き刺し、本に手を添えた。本は再び光り出した。

コオオオオオ！！

清麿

「い、いかん！！」

シェリー

「ブラゴ、ガツシュ君、逃げて！！」

ザクロ

「ゴウティアル！！」

ジュエルの攻撃が2人を襲う。

ガツシュ・ブラゴ

「ぐあああああ!!」

ジュエル

「一気にたたむわよ、ザクロ!」

ザクロ

「ギガノ・ティアル!!」

シェリー

「アイアン・グラビレイ!!」

ザクロ

「ティアルセン! ティアルガ!!」

ジュエルは呪文を連発する。

シェリー

「オルガ・レイス!!」

ブラゴのオルガ・レイスが、2つの呪文を破壊した。しかし・・・

ザクロ

「オルガ・ティアル!!」

ジュエルは、ブラゴのオルガ・レイスと同じような術を放ち、相殺した。

清麿

「ガツシュ、ひるむな！ザケルガ！！」

ガツシュはザケルガを放った。

ザクロ

「シルティア！！」

ジュエルの盾が、ガツシュの術を防いだ。

ザクロ

「ロンド・ティアル！！」

氷のムチが、ガツシュを攻撃した。

ブラゴ

「シェリー！！」

シェリー

「リオル・レイス！！」

ブラゴは術を放つ。

ジュエル

「フン、ムダよお！！」

ザクロ

「リオル・ティアルガ！！」

ジュエルの強力な術が、ブラゴを吹っ飛ばす。

ブラゴ

「ぐあああ!!」

ジュエル

「ザクロ! どんどん撃ちなさい!!」

ザクロ

「カービング・ティアル!!」

円盤が回転し、ビームが放たれた。

清麿

「ラシルド!! ザグルゼム!! ザケルガ!!」

ガツシュは次々に術を発射した。

ジュエル

「ザクロ! ひるむな!!」

ザクロ

「テオティアル!!」

ジュエルが上空から氷の雨を降らせた。

清麿・ガツシュ

「ぐああああ!!」

ブラゴ

「ガツシュ!!」

シェリー

「清麿君!!」

ガッシュ

「何をしておる、ブラゴ!!」

清麿

「オレ達にかまうな、シェリー!!」

ブラゴ

「くっ・・・」

シェリー

「ディオガ・グラビドン!!」

ブラゴの最大呪文が放たれた。しかし、ジュエルは余裕の表情をしている。

ジュエル

「ザクロ!!」

ザクロ

「ジャウロ・ティアルガ!!!!」

無数のティアルガが、ブラゴのディオガ・グラビドンを止めた。

ブラゴ

「な、何!?!」

シェリー

「ブラゴのディオガ・グラビドンを止めたの!?!」

ジュエル

「まだまだ心の力に余裕はあるわね、ザクロ。」

ザクロ

「ああ、回復液もペットボトルに入れてあるし、まだ小技も少し残ってる。いつものやり方だろ？相手を極限まで追いつめる。ん？おっと、何やらヤツらが相談を始めたようだぜ。」

清麿

「ガツシュ、ブラゴ、シェリー、聞いてくれ。おそらくアイツらは特殊な回復液を持っているようだ。つまり、小技を当ててもらいたかったダメージにはならん。」

シェリー

「つまり、彼らを倒すには、中級技で少しずつ追い詰めていけばいいのね？」

清麿

「ああ、任せられるか、ブラゴ、シェリー？」

ブラゴ

「ああ、任せてくれ。ちょうど、オレの新しい呪文も出たようだ・・」

シェリー

「え？」

コオオオオオ！！

ブラゴの本が光りだした。

シェリー

「新しい呪文が・・・出てる！！防御系の術みたいね・・・」

ブラゴ

「そうか・・・ではいこう！」

ジュエル

「相談は終わった？こちらもいかせてもらっわ。ザクロ。」

ザクロ

「ティアルセン!!」

シェリー

「キガノ・レイス!!」

ザクロ

「オルディ・ティアル!!」

清麿

「ラシルド!!ザグルゼム!!」

攻防戦は続く。

ザクロ

「バーガス・ティアルガン!!」

シェリー

「ビドム・グラビレイ!!」

ジュエルが放った四方八方からの攻撃を、空中の敵をも叩き落とす
ブラゴのビドム・グラビレイが相殺した。

ザクロ

「ジュエル！今で心の力がなくなった!!」

ジュエル

「慌てないで、まだ回復液はたくさんあるわ！さあ、飲んで！」
ザクロは回復液を飲み、再び心の力を回復した。

ジュエル

「さあ、ヤツらをまとめて吹っ飛ばすわよ。ザクロ！！」

ザクロ

「ディオ・ティアルガ！！！」

ジュエルが巨大な氷弾を放った。

ブラゴ

「いけ、シェリー！！！」

シェリー

「ディオゴウ・グラビシル！！！」

ブラゴの新呪文は、超巨大な盾だった。その盾が、ジュエルのディオ・ティアルガを受け止める。

ジュエル

「消し飛んだか？」

ジュエルは勝ったと思った。しかし、その時……

清麿

「ザグルゼム！！ザグルゼム！！！」

ジュエル

「な！？キヤアアアア！！」

バギユウ！！バギユウ！！

突然飛んできたザグルゼム2発に、ジュエルは避けきれずまともにくらった。

清麿

「よし、ザグルゼムも2発当たった！！」

シェリー

「あとは、とどめのバオウ・ザケルガね！！」

ジュエル

「くそおお、ナメるな！！力はこっちが勝ってんのよ！！ザクロ！！最大呪文よ！！！！」

ザクロ

「エルセム・ティアルドン！！！！」

ジュエルは再び、エルセム・ティアルドンを放った。

清麿

「バオウ・ザケルガ！！！！」

清麿もバオウ・ザケルガを唱え、2つの術は激突したが・・・

ジュエル

「その程度の術で、アタシの最大呪文を破れると思うな！！」

ガツシュのバオウは、ジュエルの最大呪文に押されている。

ジュエル

「勝ったー!!」

ブラゴ

「まだ負けじゃない! シェリーー!!」

シェリー

「バベルガ・グラビドン!!!!」

シェリーが唱えたブラゴの強力な術が、バオウを押しとどめた。その時、バオウが黒く変化した。

清麿・シェリー

「こ、これは・・・」

ガツシュ・ブラゴ

「黒い・・・バオウ・ザケルガ・・・」

黒く変化したバオウ・ザケルガは、ジュエルのエルセム・ティアルドンを撃ち破り、ジュエルに向かってきた。

ジュエル

「くっ・・・なんて、パワーなの・・・」

黒いバオウ・ザケルガは、ジュエルとザクロを押しつぶした。

ジュエル

「キャアアアアアア!!!!」

ドガアアアアアア!!!!

数秒後、そこには心之力を出し尽くした清麿、シェリー、ガツシュ、ブラゴがいた。ジュエルの本は、火がついて燃えだしていた。

メラメラメラメラ・・・。

ジュエル

「ハア・・・。あなた達、やるじゃない・・・アタシの負けよ。」

ザクロ

「ジュエル！ いかないでくれ！ オレはこれからどうすればいい！？ オレはオマエのおかげで、大富豪になれたんだぞ！！！」

ジュエル

「ザクロ、平気よ。この、あなたの涙から作った最後の宝石・・・これを売れば、大丈夫だわ・・・ガツシュ、ブラゴ・・・あなた達には、これを・・・。」

ガツシュ・ブラゴ

「これは・・・？」

ジュエル

「それは、シェリーの涙から作った宝石の指輪よ。これから先の戦いで、あなたがくじけそうになったら、その指輪をはめるといいわ。その指輪は、どんな困難も乗り越える、最高のお守りよ・・・。」

清麿

「ありがとう、ジュエル。」

ジュエル

「じゃあね、ザクロ。さようなら・・・」

シューウウウウ・・・。

本は燃え尽き、ジュエルは消滅した・・・。

その後、清磨達の通報で、ザクロはシェリー誘拐の罪で逮捕された。だが、4人はジュエルの事については伝えなかった・・・。

清磨

「あのザクロって人、ジュエルの事が好きだったんだろうな・・・」

シェリー

「ええ、おそらくね・・・」

数日後、ブラゴはシェリーから指輪をもらい、少し苦笑いを浮かべていた・・・。

呪文集

ジュエル

ティアルセン - 2つの円盤を重ね合わせ氷弾を放つ。

ティアルガ - 回転を加え、貫通力を増したティアルセンを放つ。

ゴウティアル - ティアルガの強化系。

シルティア - 氷による盾を放つ。

テオティアル - 空から氷の雨を落とす。

ギガノ・ティアル・ゴウティアルの強化系。

カービング・ティアル・円盤を回転させ間からビームを発射。

ロンド・ティアル・円盤の先端から氷のムチを放つ。

リオル・ティアルガ・円盤から氷を放つ。

オルガ・ティアル・ティアルガを絡ませて攻撃。

オルディ・ティアル・敵を追尾する氷弾を放つ。

ディオ・ティアルガ・円盤から巨大氷弾を放つ。

ディゴウ・シルティア・シルティアを強化した巨大な氷の盾を放つ。

バーガス・ティアルガン・四方八方から氷のヤリを放つ。

ジャウロ・ティアルガ・無数のティアルガを放つ。

エルセム・ティアルドン・円盤を高速回転させ巨大ビームを放射。

ブラゴの新呪文

ディゴウ・グラビシル・小説オリジナル呪文。巨大な重力の盾が、強力な攻撃を防ぐ。

黒いバオウ・ザケルガ・異世界編の最後にも登場した、ガツシュとブラゴの合わせ技。ガツシュのバオウ・ザケルガと、ブラゴのバベルガ・グラビドンが組み合わせられて、初めて発動する。

後編・宝石よりも大切なもの（後書き）

やっと終わりました。このお話は、石版編が終わって、異世界編も終わって少したった設定になってます。お楽しみいただけましたでしょうか。感想もぜひ送ってください。新たな小説執筆のはげみになるので。

ガツシュ「終わったのだ・・・」

清麿「しかし、ガツシュとブラゴって相性いいんじゃないの？」

シェリー「原作でも仲間になれたらいいのになあ・・・」

ブラゴ「おいおい、少年サンデーをチェックしてたらオレ達出てたぞ。」

シェリー「ウソ!？」

ブラゴ「ウソなんか言つかよ・・・」

清麿「では、この辺で・・・」

清麿・ガツシュ・ブラゴ・シェリー「ありがとうございました!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4650a/>

宝石の魔物・ジュエル

2010年10月9日23時26分発行